

両親からの呼称による情緒的発達と  
漸成発達理論に基づく発達の影響

三 好 力

Emotional development and influence of development based on  
epigenetic theory by Nicknames from parents

Chikara Miyoshi

## 目的

子どもに対しての呼び方（呼称）は、各家庭や人によりさまざまである。日本では、人称呼称の表現が他に類を見ない豊さだという。両親は、自分の子どもに対して「○○ちゃん」「○○くん」と呼んだり、呼び捨てにしたり、またはあだ名であったり、お兄ちゃん、お姉ちゃんだったりさまざまであろう。その呼び方によって、子どもの情緒特性や心理的特性などの育まれ方は違うのであろうか。単に呼び方の違いのように思えるが、「○○ちゃん」「○○くん」と呼ぶときに、きつい表現にはなりにくいし、受ける印象も柔らかくなる。また、そう呼ばれたときの心情も穏やかに違いない。子育てにおいて、呼びかけ・呼び方（呼称）が、情緒的特性や心理社会的発達に何かしら影響を与えるのかを探るための探索的研究として三好（2017）は200名の大学生と短期大学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、これらの呼称に関しては、性差による特徴がいくつかみいだされた。また、男女ともに父母が穏やかに呼ぶことに関しては、幼少期、現在を通じて基本的信頼感をはじめ、敵意や思いやりとの相関が認められた。この調査の時には漸成発達理論の青年期の主題であるアイデンティティやその次の段階の親密性などについて確認しなかったため、人数を追加して本研究で追調査・分析を行う。

## 呼称の影響

呼称・名称の心理的・社会的影響は小さくない。例えば社会的影響で考えたときに過去には精神分裂病が統合失調症に、痴呆症が認知症へと名称変更されてきた。これら名称変更の理由は社会的偏見、差別への影響が大きく看過できないことによるためである。人の認知・行動はその名称や呼称によって影響される。痴呆症であれば、その漢字一文字一文字のインパクトは大きく「痴」は「おろかなこと、ばか」を意味する言葉であり、痴漢や白痴などよい使われ方をしない漢字である。また「呆」も「おろかなこと、あきれる、あつけにとられる」を意味する言葉であり、阿呆や呆然などとよい状態を示す漢字ではない。これらによって構成された言葉である「痴呆症」という状態を「ボケ（呆け）」などと呼び、介護が措置の時代には人々はどうしようもない人だから閉じ込めておこうという意識が少なからずあり、社会の中で邪魔者として扱われ、どうせどんな対応をしても覚えていないし、分からないから大丈夫という適当な対応が多くなされてきた時代がある。痴呆症に関しては2004年に行政用語として認知症に名称を変更し、医学用語なども変更される中で人々の意識も大きく変わり、現在の若者の中ではかつて痴呆症と呼ばれていたことすら知らない人々が少なくない。松下（2014）は、「痴呆」から「認知症」への用語変更の過程について記録を取めた寄稿文の中で認知症という用語変更が、学問的な意味での変更ではなく、用語がもたらす侮蔑、偏見、差別、誤解、中傷を理由に行われたことは忘れられてはいけない事実であると述べている。これらの事例からも名称・呼称が人々の意識、認知、

態度、行動に与える影響の大きさは言うまでも無い。そして、私たちにとって一番身近な呼称は、名前の呼称や自己を示す呼称である。特に家族間の呼称は、心理的な影響が少なくないと思われる。

## 家族による呼称

津留 (1956) は、小学校五年生を通して 603 世帯、約 3500 名の家族相互の称呼について調べた。父親からの子に対しては 83% が呼び捨てで一番多く、二番目は 13% で名前や略名に「ちゃん」付けする呼び方であった。また母親からは、67% が呼び捨てで一番多く、二番目は父親同様名前や略名に「ちゃん」付けする呼び方で 27% であった。それから半世紀後の木村 (2015) の研究でも、父親から子どもへの呼称は、「名前」が 86.2%、母親から子どもへの呼称も「名前」が 81.2% と両親ともに 8 割以上名前による呼称が占めた。また、きょうだいの存在により呼称に影響を与えるという報告もある。小嶋ら (1990) は、就学前の子ども 2 人を含む家族間呼称について調査をしている。その結果、第二子が一歳児未満の時に第一子とだけいるときには、ほぼ全ての母親は子どもを名前で呼んでいるのに対して、第二子を交えた場面においては、第一子を一貫して位置名（「おにいちゃん」など）で呼ぶものがきょうだいの間隔が 36 ヶ月以上離れている場合、第二子が生後 11 ヶ月の時点で 36% に認められ、その 5 ヶ月後（第二子生後 16 ヶ月の時点）には 6 割近くに認められた。第二子が 4 才時点になると位置名で呼ぶものは半減し、名前に移行した。また、母親の第二子の呼び方は 4 才時点で名前の呼び捨てよりも「ちゃんづけ」か愛称によるものが多く、この現象は年齢格差が大きいほど多くなっていた。また、佐藤 (2007) は、現代日本において家族内呼称は、一番最年少のものを基準にした呼び方を日常的に用いており、それにより若い両親が母親や父親としての自覚を高めたり、兄や姉としての自覚や振る舞い方を身につけていくはずであるが、そういった場が少なくなっているのではないかと考察している。家族内呼称は時代とともに変化しているのも事実である。

## 家族間における呼称の影響

横谷・長谷川 (2009) は、臨床的視点から家族内の逸脱した呼称を 3 つに定義している。1 つめは「おまえ」や「君」のような家族関係を規定しない呼び方を「無規定」。2 つめは成人した娘が自分の母親を「田中さん」などと過度に形式的な表現で呼んだり、母親がその娘を「花子ちゃま」と過度に依存的な表現で呼んだりした場合の呼び方で、家族関係を奇異に規定する呼び方として「奇異」。3 つめに家族関係を混乱させる呼び方を「モデル不一致」としている。これは、姉が父親を「親父」と呼ぶが、妹は「お父さん」と呼んでいる場合であり二者の敬意などが異なることからの混乱が生じる可能性を示唆している。これらのいずれにも該当しない場合は、逸脱した呼称はないと判断している。また、横谷・

長谷川（2010a）の研究では、「無規定」な呼称は家族の全般的な機能を低下させ、それが青年の自尊心を低下させていた。「奇異な呼称」が自尊心と有意な負の相関を持っていることなどを示しつつ、これらの逸脱した呼称が家族関係の中で否定的なやり取りを示し、それが青年期の自尊心を低下させているということを示した。横谷・長谷川（2010b）は、別の研究で侮辱した呼称が夫婦関係に及ぼす影響について考察しており、侮蔑した呼称を使用する家族は、使用しない家族に比べて有意に夫婦満足度が低く、配偶者の暴力が高かったことを明らかにした。このように家族間における呼称は家族機能に何かしらの影響を与えることは間違いなく、臨床的にも大きな影響を持つものと考えられる。

### 発達心理学から見た呼称の影響

大野木（2009）は、女子青年に対して質問紙調査を行い、親子間の呼称変化について調べたところ子どもから親へは「お父さん・お母さん」が一番多く（73.5%）、「パパ・ママ」は7.4%であった。他方、親から子どもへは「呼び捨て」が一番多く（57.2%）、ついで「～ちゃん・さん」（25.7%）であった。自分から父母への呼称が変化した時期（質問2）に関して最も多い時期は中学生期であった（43.9%）。ついで「変わらない」（37.2%）であった。他方、父母から自分への呼称が変化した時期（質問3）は、同様に中学生期が一番多かった（43.9%）。次は「変わらない」（38.5%）であった。この結果は、相互の呼称の変化は中学生期と、現在も変わらないとする2つが多いこと、つまり2極化傾向があることを示している。

横谷・長谷川（2011）は、家族間呼称の研究の中で子どもから親への呼称と子どもの愛着態度について質問紙調査を行った。その結果、子どもが父親を親族呼称で呼ぶ群は、呼ばない群に比べて、愛着安定度が有意に高く、愛着不安度が有意に低かった。子どもから父親への親族呼称は子どもと父親との安定した親子関係を示した。その反面母親を親族呼称で呼ぶかどうかは、子どもの愛着態度と有意な関連を示さなかった。そこには母親と父親とで非親族呼称の内容が異なっていたことによるものと考えている。父親の非親族呼称には「はげ」などの疎遠な父子関係が推察される呼称が含まれていたが、母親の非親族呼称には「本名ちゃん」などの親密な母子関係が推察される呼称が含まれており、親族呼称群と非親族呼称群という分類による統計的差異は示しにくくなったという。

家族の呼称と家族の凝集性や適応性との関係について検討した柴田（2016）によれば、子どもが親を「お父さん」、「お母さん」と呼ぶ家族より、「パパ」、「ママ」と呼ぶ家族の方が凝集性、適応性ともに高い傾向があることが示唆された。また、凝集性の低い遊離に該当していたのは、父が娘を「呼びかけ」で呼ぶ場合と、母が娘を「逸脱」呼称で呼ぶ場合であった。適応性の低い硬直に該当していたのは、娘が母を「名前」で呼ぶ場合、父が娘を「呼びかけ」で呼ぶ場合、母が娘を「逸脱」呼称で呼ぶ場合であった。柴田（2016）は、家族の呼称によって家族機能性に違いがみられるとすると、家族の呼称は家族機能性を推

測する際に、手がかりの1つになるかもしれないと述べている。

今までの研究からも、家族間における呼称により心理的影響が少なからずあることは推測でき、幼少期の呼称が心理発達的に影響を与え各発達段階に作用している可能性も推察される。また、横谷・長谷川(2011)や柴田(2016)の研究からも呼称により心理的な安定や情緒面においても影響を与える可能性があることは推察される。本研究では、先の三好(2017)の研究と同じく探索的に影響を探るべく、幼少期の呼称と現在(青年期)の呼称から心理発達段階における影響と情緒面の影響として、攻撃性と思いやりについて探ることとした。また本研究では、先の研究において測定していなかった漸成発達理論の第5段階「アイデンティティ」と第6段階「親密性」についても関連を調べ、調査対象者を増やして調査を行った。

## 方法

対象：首都圏の私立A大学および私立B短期大学にて質問紙調査を実施した。データは母数を増やすべく2016年に実施した三好(2017)のデータを新たに追加した項目以外は合わせて分析した。2016年の調査では203名(A大学71名、B短期大学132名)、2017年の調査では、A大学生204名および私立B短期大学生117名の合計321名に質問紙調査を実施した。その結果、調査分析が部分的にでも有効である回答も含めた有効回答者は2016年で200名、2017年で305名の合計505名であった。ただし分析は内容によって性差が大きいものがあり、性別を記入していないものなどため性差を確認することができる分析対象者数は男性102名、女性368名となった。調査期間：2016年7月と2017年6～7月に実施。

## 調査内容

この調査の基本となる親族呼称については、父親、母親からどのように呼ばれていたか(呼び捨て・くん、ちゃん、さんなど・ポジティブなあだ名・ネガティブなあだ名・穏やかに呼ばれていたか)を現在と幼少期に分けて聞く基本質問項目20問に対して、「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」までの5件法で問うことにした。これは、Azam(2011)や木村(2015)が指摘するように呼称される場面や第三者の存在によって使い分けられることもあり、家族の中でも親族呼称がいつも同じとは限らず、状況依存性があると考えたためである。通常は「くん、ちゃん」やあだ名や「お姉ちゃんやお兄ちゃん」などと呼んでいても、何かしら叱責される場面においては呼び捨てで呼ばれるなど、状況により呼称は変わるため、程度で聞くことが望ましいと考えた。

それ以外の情緒的特性や心理社会的発達に関する項目については、信頼性と妥当性が既に検証されている以下の尺度を利用した。心理社会的発達段階を測定する尺度として

Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) (三好・大野・内島・若原・大野, 2003) の「基本的信頼感」7項目、「自律性」7項目、「主導性」7項目、「生産性」7項目、「アイデンティティ」7項目、「親密性」7項目の計42項目。下位尺度である各段階の発達主題の達成程度が高ければ、それぞれの下位尺度の得点も高くなるようになっている。情緒的特性を測定する尺度として、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) (安藤・曾我他, 1999) 24項目。下位尺度として①身体的攻撃、②短気、③敵意、④言語的攻撃により分析を行った。また、敵意に相対する項目として思いやり尺度 (内田・北山, 2001) 22項目を用いた。総質問項目数108項目とエラーチェック用項目3項目の合計111項目。いずれも5件法において尋ねた。なお、分析は統計ソフト SPSS Ver.24にて行った。

## 結果

**各変数の性差** 各尺度の記述統計は Table 1 と Table 2 に示すとおりである。その結果、いくつかの項目で男性と女性による差が認められたので、各項目による性差があるかを統

Table 1 呼称の記述統計

現在	Item	Sex	N	Ave	SD	幼少期	Item	Sex	N	Ave	SD
1	くん・ちゃん呼び (父)	M	101	1.26	0.88	11	くん・ちゃん呼び (父)	M	99	2.07	1.48
		F	357	1.92	1.50			F	358	2.75	1.71
2	くん・ちゃん呼び (母)	M	102	1.64	1.30	12	くん・ちゃん呼び (母)	M	102	2.54	1.61
		F	365	2.21	1.56			F	366	3.10	1.66
3	呼び捨て (父)	M	100	4.26	1.35	13	呼び捨て (父)	M	101	3.77	1.48
		F	358	3.70	1.68			F	361	3.34	1.67
4	呼び捨て (母)	M	102	4.09	1.37	14	呼び捨て (母)	M	102	3.51	1.53
		F	364	3.73	1.60			F	366	3.24	1.60
5	ポジティブなあだ名 (父)	M	100	1.62	1.18	15	ポジティブなあだ名 (父)	M	100	1.92	1.33
		F	354	2.19	1.56			F	361	2.53	1.61
6	ポジティブなあだ名 (母)	M	102	1.93	1.43	16	ポジティブなあだ名 (母)	M	102	2.15	1.49
		F	366	2.43	1.58			F	366	2.64	1.60
7	ネガティブなあだ名 (父)	M	99	1.15	0.58	17	ネガティブなあだ名 (父)	M	101	1.30	0.81
		F	357	1.28	0.81			F	361	1.26	0.79
8	ネガティブなあだ名 (母)	M	102	1.14	0.56	18	ネガティブなあだ名 (母)	M	102	1.22	0.67
		F	366	1.31	0.79			F	366	1.26	0.75
9	穏やかに呼ぶ (父)	M	100	3.79	1.32	19	穏やかに呼ぶ (父)	M	101	3.83	1.27
		F	357	3.77	1.27			F	361	4.04	1.18
10	穏やかに呼ぶ (母)	M	102	3.89	1.26	20	穏やかに呼ぶ (母)	M	102	3.90	1.25
		F	366	3.92	1.13			F	366	4.07	1.11

Table 2 各尺度の記述統計

Item	Sex	N	Ave	SD
S-ESDS (基本的信頼感)	M	102	22.02	5.07
	F	368	22.64	4.42
S-ESDS (自立)	M	102	21.21	5.84
	F	368	20.67	5.13
S-ESDS (主導)	M	102	23.03	5.58
	F	368	21.90	4.70
S-ESDS (生産性)	M	102	22.34	5.92
	F	368	21.15	5.11
S-ESDS (アイデンティティ)	M	71	21.7	4.59
	F	200	21.25	4.70
S-ESDS (親密性)	M	71	26	6.20
	F	200	26.53	5.28
攻撃性①	M	102	20.17	6.01
	F	368	18.18	5.56
攻撃性②	M	102	13.33	4.16
	F	368	14.48	3.99
攻撃性③	M	102	20.67	5.04
	F	368	21.33	4.62
攻撃性④	M	102	15.34	3.95
	F	368	14.23	3.53
思いやり	M	102	68.28	13.03
	F	368	78.29	11.45

計的に確認するために独立した  $t$  検定を実施した。有意差 ( $p < .05$ ) があったものは以下のとおりである。

呼称については、現在の呼ばれ方を聞いた質問項目群では Q.1 「現在、父親から〇〇くんや〇〇ちゃん等とくんちゃん (さん) 付けで呼ばれている。」は女性の方が高く ( $t = -5.574$ ,  $df = 279.39$ ,  $p < .001$ )、Q.2 「現在、母親から〇〇くんや〇〇ちゃん等とくんちゃん (さん) 付けで呼ばれている。」も女性が高い ( $t = -3.769$ ,  $df = 191.23$ ,  $p < .001$ )、Q.3 「現在、父親から呼び捨ての名前で呼ばれている。」( $t = 3.503$ ,  $df = 193.43$ ,  $p < .01$ )、Q.4 「現在、母親から呼び捨ての名前で呼ばれている。」( $t = 2.263$ ,  $df = 186.52$ ,  $p < .05$ ) は、いずれも男性が高かった。Q.5 「現在、父親からポジティブなあだ名 (愛称) などで呼ばれている。」( $t = -3.971$ ,  $df = 206.71$ ,  $p < .001$ )、Q.6 「現在、母親からポジティブなあだ名 (愛称) などで呼ばれている。」( $t = -3.069$ ,  $df = 175.86$ ,  $p < .01$ ) は女性が高く、Q.8 「現在、母親からネガティブなあだ名などで呼ばれている。」( $t = -2.427$ ,  $df = 224.42$ ,  $p < .05$ ) も女性が高いという差がみられた。

また、幼少期の呼ばれ方を聞いた質問項目では、Q.11 「幼少期、父親から〇〇くんや〇〇ちゃん等とくんちゃん (さん) 付けで呼ばれている。」( $t = -3.880$ ,  $df = 177.14$ ,  $p < .001$ )、Q.12 「幼少期、母親から〇〇くんや〇〇ちゃん等とくんちゃん (さん) 付けで呼ばれている。」

( $t=-3.032$ ,  $df=466$ ,  $p<.01$ )、Q.15「幼少期、父親からポジティブなあだ名(愛称)などで呼ばれている。」( $t=-3.895$ ,  $df=187.14$ ,  $p<.001$ )、Q.16「幼少期、母親からポジティブなあだ名(愛称)などで呼ばれている。」( $t=-2.940$ ,  $df=172.353$ ,  $p<.01$ )のいずれも女性が高かった。

心理社会的発達段階に関する S-ESDS では、第3段階の生産性 ( $t=2.019$ ,  $df=468$ ,  $p<.05$ )のみで男性の方が高かった。情緒的特性では、攻撃性の身体的攻撃は男性が高く ( $t=3.144$ ,  $df=468$ ,  $p<.01$ )、攻撃性の短気では女性の方が高かった ( $t=-2.532$ ,  $df=468$ ,  $p<.05$ )、攻撃性の言語的攻撃は男性が高く ( $t=2.740$ ,  $df=468$ ,  $p<.01$ )、思いやりはかなり大きい差で女性の方が高かった ( $t=-7.569$ ,  $df=468$ ,  $p<.001$ )。

以上のように全般的に性差が大きいので、各変数の分析は性別を分けて分析することにした。

**男性における現在の呼称による各変数間の関連** 男性では現在の呼び方として父親と母親からの「くん、ちゃん呼び」、母からの「呼び捨て」、父親と母親からの「ネガティブなあだ名」、父親と母親からの「穏やかに呼ぶ」に S-ESDS や情緒関連項目などと相関が見られた (Table 3)。

父親からの「くん、ちゃん呼び」は攻撃性の短気 ( $r=.26$ ,  $p<.01$ ) と攻撃性の敵意 ( $r=.21$ ,  $p<.05$ ) で正の相関が見られた。父親は家族の中で威厳としての存在性が高く、様々な場面で抑止力となる存在である。その父親が息子にご機嫌を伺うような「〇〇くん」などの呼び方をすると、抑止力としての存在が希薄になり攻撃性が高まる可能性がある。ただし、短気や敵意は、具体的な行動手前の攻撃性でもあるといえる。対して母親からの「くん、ちゃん呼び」は攻撃性の身体的攻撃 ( $r=.24$ ,  $p<.05$ ) と攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.31$ ,  $p<.001$ ) で正の相関が見られた。男性が性差から力負けしない母親からの「〇〇くん」などの優しい呼びかけに対しては、反抗しやすく身体的攻撃や言語的攻撃など具体的な行動が起こりやすくなっているのかもしれない。一方で母親からの「呼び捨て」では攻撃性の言語的攻撃 ( $r=-.20$ ,  $p<.05$ ) と負の相関が見られていることから、強健な母親像は攻撃性を抑止する力もあるとも考えられる。

Table 3 現在の呼称と漸成発達段階、攻撃性、思いやりの各変数との相関係数

男性	S-ESDS						攻撃性				
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	親密性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり
1 くん・ちゃん呼び (父親)	.013	.019	-.028	.011	-.006	-.066	.193	.256**	.212*	.181	-.008
2 くん・ちゃん呼び (母親)	.028	-.024	.004	.014	.048	.040	.242*	.175	.089	.311**	.066
3 呼び捨て (父親)	-.064	.101	.030	-.094	-.090	.030	-.065	-.195	-.124	.024	-.169
4 呼び捨て (母親)	-.067	.014	-.022	-.080	-.112	-.014	.091	.028	-.111	-.197*	-.142
5 ポジティブなあだ名 (父親)	.087	.085	-.009	.102	.190	.018	-.061	.033	-.087	.228*	.190
6 ポジティブなあだ名 (母親)	.060	.010	-.053	-.007	.182	-.010	-.091	.004	-.003	.017	.169
7 ネガティブなあだ名 (父親)	-.320**	-.011	-.134	-.209*	-.205	-.205	.188	.099	.228*	-.045	-.072
8 ネガティブなあだ名 (母親)	-.302**	-.156	-.171	-.254**	-.216	-.211	.204*	.111	.218*	-.102	-.070
9 穏やかに呼ぶ (父親)	.311**	.175	.090	.101	.104	.388**	-.208*	-.069	-.235*	.109	.141
10 穏やかに呼ぶ (母親)	.337**	.126	.023	.050	.066	.315**	-.178	-.006	-.256**	-.042	.156

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$



父親からの「ポジティブなあだ名」は攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.23, p<.05$ ) と正の相関が見られた。抑止力としての存在としての父親から、それを緩和させるような親しみのあるポジティブなあだ名の呼称をされると抑止力は低下し、言い返しやすい関係になることが推察される。父親からの「ネガティブなあだ名」は子どもの尊厳を傷つけるものでもあり、基本的信頼感 ( $r=-.32, p<.001$ ) と生産性 ( $r=-.21, p<.05$ ) で負の相関がみられるように、高圧的な態度での関わりは幼少期からの延長上にあるのか、幼児期の発達課題の達成が阻害される可能性がうかがえる。また、そのことがストレスとなり攻撃性の敵意 ( $r=.23, p<.05$ ) と正の相関が見られるように攻撃性を心理的に高めていると思われる。同様に母親からの「ネガティブなあだ名」は基本的信頼感 ( $r=-.30, p<.01$ ) と生産性 ( $r=-.25, p<.01$ ) で負の相関が見られ、攻撃性の身体的攻撃 ( $r=.20, p<.05$ ) と攻撃性の敵意 ( $r=.22, p<.05$ ) と正の相関が見られた。これらのことからわかるように自尊心を損なうようなネガティブな呼称は、幼児期の発達課題とも言える基本的信頼感や生産性などを低め、攻撃的な心理状態を作り出してしまうことが推察される。

父親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r=.31, p<.01$ ) と親密性 ( $r=.39, p<.001$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の身体的攻撃 ( $r=-.21, p<.05$ ) と攻撃性の敵意 ( $r=-.24, p<.05$ ) と負の相関が見られた。母親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r=.34, p<.001$ ) と親密性 ( $r=.32, p<.01$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の敵意 ( $r=-.26, p<.001$ ) と負の相関が見られた。先のネガティブな呼称は自尊心を損なわせる呼び方であるのに対して、ある程度許容されるような呼び方であればどのような呼び方であっても穏やかに呼ぶことは、心理的な安定を引き起こすものと思われる。今回の調査では、基本的信頼感のような他者との基本的な結びつきのために重要な項目と高い相関を示し、また親密性という他者との深い結びつきを高める項目と高い相関を示した。

**男性における幼少期の呼称による各変数間の関連** 幼少期の呼び方として父親からの「呼び捨て」、父親と母親からの「ネガティブなあだ名」、父親と母親からの「穏やかに呼ぶ」に S-ESDS や情緒関連項目と相関が見られた (Table 4)。

Table 4 幼少期の呼称と漸成発達段階、攻撃性、思いやりの各変数との相関係数

男性	S-ESDS						攻撃性				
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	親密性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり
11 くん・ちゃん呼び (父親)	.067	.086	-.028	.059	.184	.105	.109	.071	.157	.089	.0130
12 くん・ちゃん呼び (母親)	.091	.024	.002	.147	.142	.094	.096	.030	.064	.111	.123
13 呼び捨て (父親)	-.085	-.111	-.015	-.126	-.278*	-.098	-.097	-.043	-.009	-.036	-.192
14 呼び捨て (母親)	-.164	-.161	.056	-.132	-.228	-.129	.035	.129	.016	-.103	-.132
15 ポジティブなあだ名 (父親)	.025	.112	-.039	-.041	.137	.006	-.009	-.003	-.078	.134	.062
16 ポジティブなあだ名 (母親)	.035	.129	-.057	-.024	.179	.019	-.019	-.027	-.049	.076	.125
17 ネガティブなあだ名 (父親)	-.180	-.119	-.086	-.095	-.271*	-.117	.194	.115	.220*	-.125	-.024
18 ネガティブなあだ名 (母親)	-.194	-.151	-.174	-.159	-.361**	-.131	.176	.120	.239*	-.152	-.075
19 穏やかに呼ぶ (父親)	.391**	.145	.085	.103	.200	.334**	-.118	-.095	-.261**	.167	.185
20 穏やかに呼ぶ (母親)	.330**	.115	.058	.082	.145	.253*	-.085	-.054	-.292**	-.071	.175

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

父親からの「呼び捨て」ではアイデンティティ ( $r=-.28, p<.05$ ) と負の相関が見られた。父親からの「ネガティブなあだ名」はアイデンティティ ( $r=-.27, p<.05$ ) で負の相関が見られ、攻撃性の敵意 ( $r=.22, p<.05$ ) と正の相関が見られた。幼少期には父親からの呼び捨てがアイデンティティの確立にマイナスに働いているように見受けられる。そして現在の呼称同様にネガティブなあだ名による呼称は、アイデンティティの確立に負の影響を与え、敵意を高めるという結果に至った。また、母親からの呼称についても同じように、「ネガティブなあだ名」はアイデンティティ ( $r=-.36, p<.01$ ) で負の相関が見られ、攻撃性の敵意 ( $r=.24, p<.05$ ) と正の相関が見られた。

父親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r=.39, p<.001$ ) と親密性 ( $r=.33, p<.01$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の敵意 ( $r=-.26, p<.05$ ) と負の相関が見られた。母親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r=.33, p<.001$ ) と親密性 ( $r=.25, p<.05$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の敵意 ( $r=-.29, p<.01$ ) と負の相関が見られた。幼少期についても両親ともに穏やかな呼び方では、基本的信頼感と親密性が高まり、反対に攻撃性の敵意が下がっている。

**男性における S-ESDS や情緒関連項目による各変数間の関連** S-ESDS や情緒関連項目との相関を Table 5 に示す。基本的信頼感では攻撃性の敵意 ( $r=-.46, p<.001$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.37, p<.001$ ) で正の相関が見られた。自律性では攻撃性の短気 ( $r=-.24, p<.05$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.54, p<.001$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.40, p<.001$ ) と正の相関が見られた。基本的信頼感と自律性が高いと攻撃性の言語的攻撃が高くなる傾向があることが示されているが、他者に対しての基本的信頼感が高いことが、自分の意見や主張を明確に示すことに繋がるのかもしれない。多少のことで人間関係が壊れることはないという、ある種の楽観的な思想からくるものとも推測できる。また、自律性により自分自身の意思を明確に示す傾向も推察され、言語的攻撃が高まることについての矛盾はないように思われる。主導性と生産性、アイデンティティ、親密性ではそれぞれ攻撃性の敵意 ( $r=-.20, p<.01, -.33, p<.001, -.30, p<.01, -.35,$

Table 5 漸成発達段階、攻撃性、思いやりの各変数との相関係数

男性	S-ESDS					攻撃性					
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	親密性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり
S-ESDS (基本的信頼感)	-	.506**	.479**	.668**	.630**	.645**	-.098	-.023	-.459**	.368**	.344**
S-ESDS (自律性)		-	.448**	.610**	.532**	.304**	-.178	-.235*	-.535**	.397**	.004
S-ESDS (主導性)			-	.722**	.403**	.349**	.044	.149	-.200*	.476**	.192
S-ESDS (生産性)				-	.576**	.490**	.093	.111	-.334**	.489**	.153
S-ESDS (アイデンティティ)					-	.568**	.023	.139	-.295*	.556**	.283*
S-ESDS (親密性)						-	.009	.076	-.351**	.371**	.346**
攻撃性① (身体的攻撃)							-	.566**	.343**	.181	-.234*
攻撃性② (短気)								-	.399**	.192	-.041
攻撃性③ (敵意)									-	-.070	-.157
攻撃性④ (言語的攻撃)										-	.060
思いやり											-

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

$p < .01$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r = .48, p < .001, .49, p < .001, .56, p < .001, .34, p < .001$ ) で正の相関が見られた。漸成発達理論の各段階の達成度と敵意が負の相関になることは、安定した精神発達が他者に向ける攻撃性を下げる傾向にあるようである。また、それらを補完するようにそれらの項目は他者に対する思いやりとは高い相関を示している。思いやりと相関があったのは、基本的信頼感、アイデンティティ、親密性と正の相関 ( $r = .34, p < .001, .28, p < .05, .35, p < .01$ ) があり、身体的攻撃と負の相関 ( $r = -.23, p < .05$ ) が見られた。

**女性における現在の呼称による各変数間の関連** 女性では現在の呼び方として父親と母親からの「くん、ちゃん呼び」、父親と母親からの「呼び捨て」、父親からの「ポジティブなあだ名」、父親と母親からの「ネガティブなあだ名」、父親と母親からの「穏やかに呼ぶ」に各 S-ESDS や情緒関連項目と相関が見られた (Table 6)。

父親からの「くん、ちゃん呼び」は主導性 ( $r = .12, p < .05$ ) で正の相関が見られた。母親からの「くん、ちゃん呼び」は攻撃性の敵意 ( $r = .12, p < .05$ ) で正の相関が見られた。異性である父親からの「〇〇ちゃん」呼びは、男子でみられたような敵意などを生むことなく主導性のみとの相関を示した。対して同性である母親の「〇〇ちゃん」呼びは、男子同様に攻撃性の一部を高めるようである。父親からの「呼び捨て」ではアイデンティティ ( $r = .15, p < .05$ )、親密性 ( $r = .14, p < .05$ ) と思いやり ( $r = .11, p < .05$ ) で正の相関がみられた。攻撃性の短気 ( $r = -.14, p < .01$ ) と負の相関が見られた。男子では「呼び捨て」は、相関がほとんどみられない項目であったが、女子においては異性である父親からの「呼び捨て」によりアイデンティティと親密性、思いやりという三つの項目で相関が高くなっている。また、母親からの「呼び捨て」でも思いやり ( $r = .18, p < .001$ ) と正の相関が見られた。

父親からの「ポジティブなあだ名」は主導性 ( $r = .17, p < .001$ ) と正の相関が見られた。父親からの「ネガティブなあだ名」はアイデンティティ ( $r = -.14, p < .05$ ) で負の相関が見られた。「ポジティブなあだ名」では、「くん、ちゃん呼び」と同じように父親からは主導性が高まっていたが、「ネガティブなあだ名」は、アイデンティティを下げる結果になった。同様に母親からの「ネガティブなあだ名」は基本的信頼感 ( $r = -.15, p < .01$ ) と自律

Table 6 現在の呼称と漸成発達段階、攻撃性、思いやりの各変数との相関係数

女性	S-ESDS					攻撃性					
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	親密性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり
1 くん・ちゃん呼び (父親)	.031	.042	.117*	.014	.028	-.059	.004	-.054	-.076	-.030	-.016
2 くん・ちゃん呼び (母親)	.038	.048	.070	.052	.062	-.054	.026	.021	-.116*	.013	-.090
3 呼び捨て (父親)	.017	.052	-.082	.021	.147*	.143*	-.068	-.142**	-.084	-.002	.111*
4 呼び捨て (母親)	.032	.067	.008	.061	.098	.094	.018	-.038	.001	.045	.178**
5 ポジティブなあだ名 (父親)	.094	.038	.170**	.102	.064	.009	-.087	-.002	-.004	.066	.047
6 ポジティブなあだ名 (母親)	.087	-.026	.087	.014	.001	.006	-.011	.006	.020	.015	-.019
7 ネガティブなあだ名 (父親)	-.079	-.074	-.041	-.037	-.144*	-.139	.036	.046	.013	.013	-.060
8 ネガティブなあだ名 (母親)	-.152**	-.164**	-.021	-.083	-.102	-.140*	.128*	.105*	.137**	-.039	-.039
9 穏やかに呼ぶ (父親)	.240**	.111*	.079	.149**	.167*	.159*	-.121*	-.127*	-.219**	.004	.208**
10 穏やかに呼ぶ (母親)	.281**	.108*	.086	.196**	.222**	.192**	.040	-.081	-.198**	-.071	.188**

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

性 ( $r = -.16, p < .01$ )、親密性 ( $r = -.14, p < .05$ ) で負の相関が見られ、攻撃性の身体的攻撃 ( $r = .13, p < .05$ ) と攻撃性の短気 ( $r = .11, p < .05$ )、攻撃性の敵意 ( $r = .14, p < .05$ ) と正の相関が見られた。同性であり母性の象徴である母親からの「ネガティブなあだ名」は、漸成発達理論の主要な達成を阻害することと攻撃性を高める結果となった。

父親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r = .24, p < .001$ ) と自律性 ( $r = .11, p < .05$ )、生産性 ( $r = .15, p < .01$ )、アイデンティティ ( $r = .17, p < .05$ )、親密性 ( $r = .16, p < .05$ )、思いやり ( $r = .21, p < .001$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の身体的攻撃 ( $r = -.12, p < .05$ ) と、攻撃性の短気 ( $r = -.13, p < .05$ )、攻撃性の敵意 ( $r = -.22, p < .001$ ) と負の相関が見られた。母親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r = .28, p < .001$ ) と自律性 ( $r = .11, p < .05$ )、生産性 ( $r = .20, p < .001$ )、アイデンティティ ( $r = .22, p < .01$ )、親密性 ( $r = .19, p < .01$ )、思いやり ( $r = .19, p < .001$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の敵意 ( $r = -.20, p < .001$ ) と負の相関が見られた。両親とも「穏やかな呼び方」では、主要な漸成発達段階の各主題の達成度が高くなり、攻撃性が下がり、思いやりが高いという結果になった。

**女性における幼少期の呼称による各変数間の関連** 幼少期の呼び方として父親と母親からの「呼び捨て」、父親からの「ポジティブなあだ名」、父親と母親からの「ネガティブなあだ名」、父親と母親からの「穏やかに呼ぶ」に S-ESDS や情緒関連項目と相関が見られた (Table 7)。

父親からの「呼び捨て」では、主導性 ( $r = -.12, p < .05$ ) と攻撃性の短気 ( $r = -.14, p < .01$ ) で負の相関が見られた。幼少期に異性の親である父親から「呼び捨て」で呼称された印象を持つ女性は、主導性や攻撃性の短気が低いことから、少なからず控えめな行動特性を持つのかもしれない。対して母親からの「呼び捨て」は、思いやり ( $r = .15, p < .01$ ) と正の相関がみられた。父親からの「ポジティブなあだ名」は、現代の呼称と同様に主導性 ( $r = .13, p < .05$ ) と正の相関が見られた。父親からの「ネガティブなあだ名」は、基本的信頼感 ( $r = -.11, p < .05$ ) と自律性 ( $r = -.12, p < .05$ )、で負の相関が見られた。この結果は、現代の呼称がアイデンティティに影響を与えているのに対して、幼少期の呼称は発達段階の初期の主題に影響を与えていることを考えると興味深いものである。母親からの「ネガティブなあだ名」

Table 7 幼少期の呼称と漸成発達段階、攻撃性、思いやりの各変数との相関係数

女性	S-ESDS						攻撃性				
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	親密性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり
11 くん・ちゃん呼び (父親)	-.018	.042	.076	.016	.034	-.042	.027	.076	-.007	.047	-.052
12 くん・ちゃん呼び (母親)	.032	.009	.051	.037	.072	-.013	.037	.009	-.072	.055	-.023
13 呼び捨て (父親)	.020	.005	-.115*	-.011	.094	.116	-.030	-.139**	-.086	-.026	.101
14 呼び捨て (母親)	.024	-.007	-.063	.028	.103	.119	-.023	-.076	-.032	-.031	.147**
15 ポジティブなあだ名 (父親)	.044	.001	.134*	.081	.011	-.073	-.009	-.006	.016	.057	-.013
16 ポジティブなあだ名 (母親)	.043	-.053	.089	.035	-.053	-.120	-.013	-.017	.046	.019	-.001
17 ネガティブなあだ名 (父親)	-.113*	-.124*	-.035	-.014	-.132	-.130	.002	.047	.042	-.002	-.047
18 ネガティブなあだ名 (母親)	-.131*	-.171**	-.057	-.063	-.080	-.162*	.007	.088	.132*	-.065	.013
19 穏やかに呼ぶ (父親)	.237**	.101	.066	.132*	.148*	.170*	-.032	-.137**	-.193**	-.010	.194**
20 穏やかに呼ぶ (母親)	.256**	.129*	.114*	.159**	.200**	.222**	-.001	-.115*	-.180**	-.017	.231**

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

は基本的信頼感 ( $r=-.13, p<.05$ ) と自律性 ( $r=-.17, p<.001$ )、親密性 ( $r=-.16, p<.05$ ) で負の相関が見られ、攻撃性の敵意 ( $r=.13, p<.05$ ) と正の相関が見られた。これらの結果も現代の呼称と同様な特徴がうかがえた。父親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r=.24, p<.001$ ) と生産性 ( $r=.13, p<.05$ )、アイデンティティ ( $r=.15, p<.05$ )、親密性 ( $r=.17, p<.05$ )、思いやり ( $r=.19, p<.001$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の短気 ( $r=-.14, p<.01$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.19, p<.001$ ) と負の相関が見られた。母親からの「穏やかな呼び方」では、基本的信頼感 ( $r=.26, p<.001$ ) と自律性 ( $r=.13, p<.05$ )、主導性 ( $r=.11, p<.05$ )、生産性 ( $r=.16, p<.01$ )、アイデンティティ ( $r=.20, p<.01$ )、親密性 ( $r=.22, p<.05$ )、思いやり ( $r=.23, p<.001$ ) で正の相関が見られ、攻撃性の短気 ( $r=-.12, p<.05$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.18, p<.001$ ) と負の相関が見られた。両親とも「穏やかな呼び方」では、現代の呼称同様に主要な漸成発達段階の各主題の達成度が高くなり、攻撃性が下がり、思いやりが高いという結果になった。

**女性における S-ESDS や情緒関連項目による各変数間の関連** S-ESDS や情緒関連項目との相関を Table 8 に示す。基本的信頼感では攻撃性の身体的攻撃 ( $r=-.26, p<.001$ )、攻撃性の短気 ( $r=-.24, p<.001$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.56, p<.001$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.18, p<.001$ ) で正の相関が見られた。攻撃性とは基本的に負の相関があるようであるが、言語的攻撃のみ正の相関になり、基本的信頼感の高さが言語的攻撃を高める結果となっている。他者への信頼感の高さが遠慮しない口の利き方などを増長するのかもしれない。自己主張や意見をはっきり言うような項目なので、他者との関係が壊れることがないという他者への信頼もうかがい知れる。自律性でも身体的攻撃 ( $r=-.12, p<.05$ )、攻撃性の短気 ( $r=-.15, p<.01$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.44, p<.001$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.45, p<.001$ ) と正の相関が見られた。自律性においても同様の傾向が見られたが、特に攻撃性の敵意との負の相関と言語的攻撃との正の相関は相関係数も際だって高かった。自律性の達成が高いと、敵意は極めて低いことから他者を気にせず自分を律した生き方をしているのかもしれない。また、言語的攻撃が高くなるこ

Table 8 漸成発達段階、攻撃性、思いやりの各変数との相関係数

女性	S-ESDS					攻撃性					
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり	
S-ESDS (基本的信頼感)	-	.526**	.431**	.622**	.621**	.634**	-.260**	-.242**	-.559**	.180**	.290**
S-ESDS (自律性)		-	.444**	.655**	.683**	.472**	-.115*	-.152**	-.498**	.452**	.063
S-ESDS (主導性)			-	.595**	.374**	.313**	-.035	.084	-.153**	.392**	.121*
S-ESDS (生産性)				-	.610**	.481**	-.181**	-.212**	-.435**	.337**	.155**
S-ESDS (アイデンティティ)					-	.552**	-.173*	-.117	-.492**	.316**	.115
S-ESDS (親密性)						-	-.265**	-.162*	-.520**	.168*	.378**
攻撃性① (身体的攻撃)							-	.491**	.279**	.133*	-.387**
攻撃性② (短気)								-	.473**	.276**	-.156**
攻撃性③ (敵意)									-	-.060	-.144**
攻撃性④ (言語的攻撃)										-	-.094
思いやり											-

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

とは、自己主張を明確にする行動特徴から推察される。主導性では自律性同様に攻撃性の敵意 ( $r=-.15, p<.01$ ) と負の相関がみられた。生産性では身体的攻撃 ( $r=-.18, p<.001$ )、攻撃性の短気 ( $r=-.21, p<.001$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.44, p<.001$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.34, p<.001$ ) で正の相関が見られた。自己の効力への確信を持つ項目である生産性からも、環境をある程度コントロールするような自己効力感を持ち、攻撃性は低まることも推察される。他の項目同様言語性では、他者への明確な主張から高くなっているのであろう。アイデンティティでは、身体的攻撃 ( $r=-.17, p<.05$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.49, p<.001$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.32, p<.05$ ) で正の相関が見られた。親密性では、身体的攻撃 ( $r=-.27, p<.001$ )、攻撃性の短気 ( $r=-.16, p<.05$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.52, p<.001$ ) と負の相関が見られ、攻撃性の言語的攻撃 ( $r=.17, p<.05$ ) で正の相関が見られた。アイデンティティと親密性でも、同様の特徴がみられ主要な攻撃性は低く、言語的攻撃のみ高くなるという結果になった。明確な主張を行うというのは、大人の対人関係においては大切なことであることから、このような結果になるのだと思われる。

思いやりと相関があったのは、基本的信頼感、主導性、生産性、親密性と正の相関 ( $r=.29, p<.001, .12, p<.05, .16, p<.01, .38, p<.001$ ) があり、攻撃性の身体的攻撃 ( $r=-.39, p<.001$ )、攻撃性の短気 ( $r=-.16, p<.01$ )、攻撃性の敵意 ( $r=-.14, p<.01$ ) と負の相関が見られた。思いやりと一番相関が高いのが、漸成発達段階の親密性であった。他者と親密になることは、他者を思いはかり行動することにもなるので、自然な結果ともいえる。また、具体的な身体攻撃のような項目とも負の相関が極めて高かった。相手を思いはかることは、当然直接行動を抑制すると思われる。

**3群による差の検討** 次に S-ESDS の 6 項目と攻撃性尺度の 4 項目、思いやり尺度の各得点をパーセンタイルから 3 群に分け、それぞれ上位群 (H)、中位群 (M)、低位群 (L) に分けた。それらを独立変数 (要因) として現在と幼少期の呼称についての質問を従属変数とする一要因の分散分析を行った。さらに Bonferroni 多重比較により 3 群を比較した。

S-ESDS からみた場合、各発達段階の達成度の高群と低群で、親からの呼ばれ方に差があるかどうかということになるが、有意差のあった項目の結果を Table 9 と Table 10 に示す。その中でも特に高群と低群での差があったものは、基本的信頼感について現在の呼称では、男性では母親が穏やかに呼ぶことで、女性では父親と母親ともに穏やかに呼ぶことであった。これは幼少期の呼称でも同じ傾向が見られた。また幼少期の女性のみの特徴としては、基本的信頼感の低位群がネガティブなあだ名での呼称が、父親と母親ともに高い傾向がみいだされた。また、男性の幼少期のみ基本的信頼感の低位群が、母親の呼び捨てが高い傾向にあった。

自律性に関しては、現在も幼少期も共に自律性低位群において、母親のネガティブなあだ名による呼称が高い傾向にあった。また幼少期の女性のみ、父親からもネガティブなあ

Table 9 現在の呼称による分散分析で有意差 (p<.05) があった F 値と多重比較

性別	S-ESDS						攻撃性				
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	親密性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり
男性	1								3.19 (2, 98)		
	2								L < H		
	3	4.22 (2, 97)									
	4	H < M									
	5									3.50 (2, 97)	
	6									L < H	
	7										
	8										
	9						3.49 (2, 68)				
	10						M < L				
女性	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										
	10										

Table 10 幼少期による呼称の分散分析で有意差 (p<.05) があった F 値と多重比較

性別	S-ESDS						攻撃性				
	基本的信頼感	自律性	主導性	生産性	アイデンティティ	親密性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃	思いやり
男性	11										
	12										
	13										
	14										
	15										
	16										
	17										
	18										
	19										
	20										
女性	11										
	12										
	13										
	14										
	15										
	16										
	17										
	18										
	19										
	20										

だ名による呼称も高い傾向にあった。男性は、自律性の高さにおいて呼称に差がみられなかった。

主導性に関しては、女性のみで主導性の高い群において、現在父親からポジティブなあだ名で呼称がなされている傾向にあった。また、主導性の低位群においては、幼少期に父親から「ちゃん」呼びされていた傾向が高い。男性では主導性の達成の高低による一切の傾向が見られなかった。

生産性では、主導性同様に、男性では生産性の達成の高低による一切の傾向は見られなかった。女性のみ生産性の高い人は、幼少期も現在も両親から穏やかに呼ばれている。

アイデンティティでは、前段階同様に、男性でもアイデンティティの達成の高低による一切の傾向は見られなかった。女性のみアイデンティティの高い人は、幼少期も現在も母親から穏やかに呼ばれている。父親からは多重比較の結果、低位と中位との差しからみられなかった。同性としてモデルになりやすさや親しみなどの影響があるのかもしれない。

そして次の親密性では、先の2つの段階の傾向同様、親密性の高い群は両親から幼少期も現在も穏やかに呼ばれている。男性のみ、幼少期に母親からの穏やかな呼称に差がないという結果であった。

## 考察

今回の調査で示された一番大きな特徴は、両親からの呼称において一番重要なものは、穏やかな呼びかけであることであった。特に女性への影響が強いことが示された。基本的信頼感をはじめとして、生産性、アイデンティティや親密性、さらに思いやりと非常に高い関わりを示した。対して男性にはそこまでの影響を示さず、基本的信頼感や親密性などとの関係程度しか示していない。男性には、時に強い口調であることも大事なのかもしれない。男性と女性では、性役割の問題や社会的望ましさなど、複合的に望まれる呼称も変わってくるのが推察される。その結果、両親の関わり方や声のかけ方は、随分変わってくるであろう。その一つに現在における男性への呼称の中で、父親に「〇〇くん・〇〇ちゃん」呼びをされている人たちは、攻撃性の短気、敵意に有意な相関が見られていた。有意差は出なかったが、他の攻撃性においても弱い相関が見られていた。これは女子には全く見られず、無相関であることから、家族中での父親の位置づけや役割などが、希薄になることや低位になることにより生じる現象かもしれない。子育てにおける父親の重要性も、あらためて示されているといえる。また、同じように母親も息子に対して「〇〇くん・〇〇ちゃん」呼びをしていると、身体的攻撃と言語的攻撃が高くなっていることから、両親ともに成人するまで「〇〇くん・〇〇ちゃん」呼びをすることは、子育てにおいてどこかで甘やかしが出てしまう可能性があるのかもしれない。子育てを考える上では、穏やかに呼びかけることは子どもの精神的安定と成長を促すようであるが、時には厳しい口調や親としての威厳をしめることも重要になると思われる。実際女性においては、父親からの



「呼び捨て」がアイデンティティと親密性、思いやりを高めている。そういう意味では適度な距離感を保つことが重要で、友達のような親子というなれなれしい関係は健全な子育てには時に阻害要因となる可能性がある。

また、現在における男女両性において「ネガティブなあだ名」では、漸成発達理論の各主題の達成に負の相関が見られた。このことから一番身近な存在である両親からネガティブな呼びかけをされることは、本人のメンタルに多大な影響を与えることが示された。たとえ冗談であっても、継続的にネガティブな呼びかけはすべきではなく、自尊心などを喪失し本人の成長に大きな影を落とすことは明らかであるといえる。

漸成発達理論の各主題と攻撃性との関係は、明確な特徴が導出された。男女両性ともに言語的攻撃以外の攻撃性とは負の相関を示し、攻撃性が抑制されていることがわかる。特に敵意とは高い負の相関を示しており、そもそも敵意を持つことがない成熟した人間への成長が示唆される。反して言語的攻撃とは高い正の相関が示されており、この項目内容から強い自己主張や自己の意志を明確に他者へ伝えるという面が、数値に表れているように思われる。自分の意見を相手の感情を害することなく、それらの気持ちに配慮しながらも明確に示すことは、アサーションという高度な対人技術を必要とする。それもまさに成熟した大人の条件ともいえる。そして、各主題の達成度の高い人は、思いやりも高くなる傾向があり、他者への配慮ができることもまた大人の条件といえる。

今回の調査は、三好（2017）を補完する探索的な研究であったが、そこからある程度傾向が示された。穏やかに呼びかけることが重要であることとネガティブな呼称はすべきではないこと。また、男女における呼びかけのベストは違うのではないかということである。今後、男子と女子に各発達段階でどのように呼びかけて、接することが重要なのかをさらに細かくみていく必要がある。

## 引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子  
 (1999) 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理學研究 70 (5), 384-392.
- Azam Sepehri Badi (2011) 現代日本語における家族から呼ばれるときの呼称 一橋大学センター紀要, (2), 57-71.
- 木村博旨 (2015) 大学生における家族内呼称の心理的同一化傾向と家族機能及び家族満足度との関連 龍谷大学大学院文学研究科紀要 37, 118-139.
- 小嶋秀夫・河合優年・森下正康・村上京子 (1990) 親子・きょうだい間における自他の呼称 日本教育心理学会総会発表論文集 32, 124.
- 松下正明 (2014) 「痴呆」から「認知症」へ: stigma と用語変更 老年精神医学雑誌 25 (2), 199-209.

- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003) Ochse&Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究 45, 65-76.
- 三好 力 (2017) 両親の子どもに対する呼称と情緒特性の関連について - 攻撃性と思いやりを中心とする情緒特性および青年前期までの心理社会的発達の探索的研究 日本発達心理学会大会発表論文集 28, 363.
- 大野木裕明 (2009) 女子青年からみた親子間の呼称と心理的離乳 仁愛大学研究紀要. 人間生活学部篇 1, 53-61.
- 佐藤達全 (2007) 家族の呼び方と子ども観について: 「いじめ」や虐待の問題を考える手がかりとして 育英短期大学研究紀要 24, 23-36.
- 柴田雄企 (2016) 夫婦・親子の呼称と家族機能性: 短期大学女子学生を対象として 大分県立芸術文化短期大学研究紀要 54, 35-42.
- 津留 宏 (1956) 家族称呼からみた家族関係 教育心理学研究 4 (1), 12-20.
- 内田由紀子・北山 忍 (2001) 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理學研究 72 (4), 275-282.
- 横谷謙次・長谷川啓三 (2009) 「逸脱した」呼称の定義 東北大学大学院教育学研究科研究年報 58 (1), 197-208.
- 横谷謙次・長谷川啓三 (2010a) 「逸脱した呼称」の家族機能測定としての信頼性と妥当性 家族心理学研究 24 (1), 30-41.
- 横谷謙次・長谷川啓三 (2010b) 侮蔑した呼称は配偶者暴力を示す 東北大学大学院教育学研究科研究年報 58 (2), 229-238.
- 横谷謙次・長谷川啓三 (2011) 子どもから親への呼称と子どもの愛着態度 家族心理学研究 25 (1), 45-55.